

## CHAPTER 22

マクゴナガル先生が真に受けてくれたことでほっとしたハリーは、迷うことなくベッドから飛び降り、ガウンを着て、メガネを鼻にぐいと押しつけた。

「ウィーズリー、あなたも一緒に来るべきです」マクゴナガル先生が言った。

二人は先生のあとに従いて、押し黙っているネビル、ディーン、シェーマスの前を通り、寝室を出て、螺旋階段から談話室へ下りた。そして肖像画の穴をくぐり、月明かりに照らされた「太った婦人」の廊下に出た。

ハリーは体の中の恐怖が、いまにも溢れ出しそうな気がした。

駆けだして、大声でダンブルドアを呼びたかった。

ウィーズリーおじさんは、こうして僕たちがゆるゆる歩いているときにも、血を流しているのだ。

あの牙が（ハリーは必死で「自分の牙」とは考えないようにした）、毒を持っていたらどうしよう？ 三人はミセス ノリスの前を通った。猫はランプのような目を三人に向け、微かにシャーッと鳴いたが、マクゴナガル先生が「シッ！」と追うと、こそこそと物陰に隠れた。

それから数分後、三人は校長室の入口を護衛する石のガーゴイル像の前に出た。

「フィフィ フィズビー」マクゴナガル先生が唱えた。

ガーゴイル像に命が吹き込まれ、脇に飛び退いた。

その背後の壁が二つに割れ、石の階段が現れた。

螺旋状のエスカレーターのように、上へ上へと動いている。

三人が動く階段に乗ると、背後で壁が重々しく閉じ、三人は急な螺旋を描いて上へ上へと運ばれ、最後に磨き上げられた樫の扉の前に到着した。

扉にはグリフィンの形をした真鍮のドアノッカーがついている。

真夜中をとうに過ぎていたが、部屋の中から、ガヤガヤ話す声がはっきりと聞こえた。

## Chapter 22

### St. Mungo's Hospital for Magical Maladies and Injuries

Harry was so relieved that she was taking him seriously that he did not hesitate, but jumped out of bed at once, pulled on his dressing gown, and pushed his glasses back onto his nose.

“Weasley, you ought to come too,” said Professor McGonagall.

They followed Professor McGonagall past the silent figures of Neville, Dean, and Seamus, out of the dormitory, down the spiral stairs into the common room, through the portrait hole, and off along the Fat Lady's moonlit corridor. Harry felt as though the panic inside him might spill over at any moment; he wanted to run, to yell for Dumbledore. Mr. Weasley was bleeding as they walked along so sedately, and what if those fangs (Harry tried hard not to think “my fangs”) had been poisonous? They passed Mrs. Norris, who turned her lamplike eyes upon them and hissed faintly, but Professor McGonagall said, “Shoo!” Mrs. Norris slunk away into the shadows, and in a few minutes they had reached the stone gargoyle guarding the entrance to Dumbledore's office.

“Fizzing Whizbee,” said Professor McGonagall.

The gargoyle sprang to life and leapt aside; the wall behind it split in two to reveal a stone staircase that was moving continuously upward like a spiral escalator. The three of them stepped onto the moving stairs; the wall closed behind them with a thud, and they were

ダンブルドアが少なくとも十数人の客をもてなしているような声だった。  
マクゴナガル先生がグリフィンの形をしたノッカーで扉を三度叩いた。  
すると、突然、誰かがスイッチを切ったかのように、話し声がやんだ。  
扉が独りでに開き、マクゴナガル先生はハリーとロンを従えて中に入った。  
部屋は半分暗かった。テーブルに置かれた不思議な銀の道具類は、いつもならくるくる回ったりポッポッと煙を吐いたりしているのに、いまは音もなく動かなかった。  
壁一面に掛けられた歴代校長の肖像画は、全員額の中で寝息を立てている。  
入口扉の裏側で、白鳥ほどの大きさの、赤と金色の見事な鳥が、翼に首を突っ込み、止まり木でまどろんでいた。  
「おう、あなたじゃったか、マクゴナガル先生……それに…-ああ」  
ダンブルドアは机に向かい、背もたれの高い椅子に座っていた。  
机に広げられた書類を照らす蠟燭の明かりが、前屈みになったダンブルドアの姿を浮かび上がらせた。  
雪のように白い寝間着の上に、見事な紫と金の刺繍を施したガウンを着ている。  
しかし、はっきり目覚めているようだ。  
明るいブルーの目が、マクゴナガル先生をしっかりと見据えていた。  
「ダンブルドア先生、ポッターが……そう、悪夢を見ました」マクゴナガル先生が言った。  
「ポッターが言うには……」  
「悪夢じゃありません」ポッターが素早く口を挟んだ。  
マクゴナガル先生がハリーを振り返った。少し顔をしかめている。  
「いいでしょう。では、ポッター、あなたからそのことを校長先生に申し上げなさい」  
「僕……あの、たしかに眠っていました…」  
ハリーは恐怖に駆られ、ダンブルドアにわかってもらおうと必死だった。  
それなのに、校長がハリーのほうを見もせず、組み合わせた自分の指をしげしげと眺め

moving upward in tight circles until they reached the highly polished oak door with the brass knocker shaped like a griffin.

Though it was now well past midnight, there were voices coming from inside the room, a positive babble of them. It sounded as though Dumbledore was entertaining at least a dozen people.

Professor McGonagall rapped three times with the griffin knocker, and the voices ceased abruptly as though someone had switched them all off. The door opened of its own accord and Professor McGonagall led Harry and Ron inside.

The room was in half darkness; the strange silver instruments standing on tables were silent and still rather than whirring and emitting puffs of smoke as they usually did. The portraits of old headmasters and headmistresses covering the walls were all snoozing in their frames. Behind the door, a magnificent red-and-gold bird the size of a swan dozed on its perch with its head under its wing.

“Oh, it’s you, Professor McGonagall … and … *ah*.”

Dumbledore was sitting in a high-backed chair behind his desk; he leaned forward into the pool of candlelight illuminating the papers laid out before him. He was wearing a magnificently embroidered purple-and-gold dressing gown over a snowy-white nightshirt, but seemed wide awake, his penetrating light-blue eyes fixed intently upon Professor McGonagall.

“Professor Dumbledore, Potter has had a … well, a nightmare,” said Professor McGonagall. “He says …”

“It wasn’t a nightmare,” said Harry quickly.

ているので、少し苛立っていた。

「でも、普通の夢じゃなかったんです……現実のことでした……僕はそれを見たんです……」ハリーは深く息を吸った。

「ロンのお父さんがーウィーズリーさんがー巨大な蛇に襲われたんです」言い終えた言葉が、空中に虚しく反響するような感じがした。

バカバカしくー滑稽にさえ聞こえた。

一瞬間が空き、ダンブルドアは背もたれに寄り掛かって、何か瞑想するように天井を見つめた。

ショックで蒼白な顔のロンが、ハリーからダンブルドアへと視線を移した。

「どんなふうに見たのかね？」ダンブルドアが静かに聞いた。

まだハリーを見てくれない。

「あの……わかりません」ハリーは腹立たしげに言ったーそんなこと、どうでもいいじゃないか？

「僕の顔の中で、だと思いますー」

「私の言ったことがわからなかったようだね」ダンブルドアが同じく静かな声で言った。

「つまり……憶えておるかね？ーあーー襲われたのを見ていたとき、きみはどの場所にいたのかね？犠牲者の脇に立っていたとか、それとも、上からその場面を見下ろしていたのかね？」

あまりに奇妙な質問に、ハリーは口をあぐり開けてダンブルドアを見つめた。まるで何もかも知っているような……。

「僕が蛇でした」ハリーが言った。

「全部、蛇の目から見ました」

一瞬、誰も言葉を発しなかった。やがてダンブルドアが、相変わらず血の気が失せた顔のロンに目を移しながら、さっきとは違う鋭い声で聞いた。

「アーサーはひどい怪我なのか？」

「はい」ハリーは力んで言ったーどうしてみんな理解がのろいんだ？あんなに長い牙が脇腹を貫いたら、どんなに出血するかわからないのか？それにしても、ダンブルドアは、せめて僕の顔を見るぐらいは礼儀じゃないか？

Professor McGonagall looked around at Harry, frowning slightly.

“Very well, then, Potter, you tell the headmaster about it.”

“I ... well, I *was* asleep. ...” said Harry and even in his terror and his desperation to make Dumbledore understand he felt slightly irritated that the headmaster was not looking at him, but examining his own interlocked fingers. “But it wasn’t an ordinary dream ... it was real. ... I saw it happen. ...” He took a deep breath, “Ron’s dad — Mr. Weasley — has been attacked by a giant snake.”

The words seemed to reverberate in the air after he had said them, slightly ridiculous, even comic. There was a pause in which Dumbledore leaned back and stared meditatively at the ceiling. Ron looked from Harry to Dumbledore, white-faced and shocked.

“How did you see this?” Dumbledore asked quietly, still not looking at Harry.

“Well ... I don’t know,” said Harry, rather angrily — what did it matter? “Inside my head, I suppose —”

“You misunderstand me,” said Dumbledore, still in the same calm tone. “I mean ... can you remember — er — where you were positioned as you watched this attack happen? Were you perhaps standing beside the victim, or else looking down on the scene from above?”

This was such a curious question that Harry gaped at Dumbledore; it was almost as though he knew ...

“I was the snake,” he said. “I saw it all from the snake’s point of view. ...”

Nobody else spoke for a moment, then Dumbledore, now looking at Ron, who was still whey-faced, said in a new and sharper

ところが、ダンブルドアは素早く立ち上がった。

あまりの速さに、ハリーが飛び上がるほどだった。

それから、天井近くに掛かっている肖像画の一枚に向かって話しかけた。

「エバラード！」鋭い声だった。

「それに、ディリス、あなたもだ！」

短く黒い前髪の青白い顔をした魔法使いと、その隣の額の銀色の長い巻き毛の老魔女が、深々と眠っているように見えたが、すぐに目を開けた。

「聞いていたじゃろうな？」魔法使いが頷き、魔女は「当然です」と答えた。

「その男は、赤毛でメガネを掛けておる」ダンブルドアが言った。

「エバラード、あなたから警報を発する必要がある。その男が然るべき者によって発見されるよう——」二人とも頷いて、横に移動し、額の端から姿を消した。しかし、隣の額に姿を現すのではなく（通常、ホグワーツではそうなるのだが）、二人とも消えたままだった。

一つの額には真っ黒なカーテンの背景だけが残し、もう一つには立派な革張りの肘掛椅子が残っていた。壁に掛かった他の歴代校長は、間違いなく寝息を立て、ヨダレを垂らして眠り込んでいるように見えるが、気が付くとその多くが、閉じた瞼の下から、ちらちらとハリーを盗み見ている。

扉をノックしたときに中で話をしていたのが誰だったのか、ハリーは突然悟った。

「エバラードとディリスは、ホグワーツの歴代校長の中でももっとも有名な二人じゃ」ダンブルドアはハリー、ロン、マクゴナガル先生の脇を素早く通り過ぎ、今度は扉の脇の止まり木で眠る見事な鳥に近づいていった。

「高名な故、二人の肖像画はほかの重要な魔法施設にも飾られておる。自分の肖像画であれば、その間を自由に往き来できるので、あの二人は外で起こっているであろうことを知らせてくれるはずじゃ……」

「だけど、ウィーズリーおじさんがどこにいるかわからない！」ハリーが言った。

「三人とも、お座り」ダンブルドアはハリー

voice, “Is Arthur seriously injured?”

“Yes,” said Harry emphatically — why were they all so slow on the uptake, did they not realize how much a person bled when fangs that long pierced their side? And why could Dumbledore not do him the courtesy of looking at him?

But Dumbledore stood up so quickly that Harry jumped, and addressed one of the old portraits hanging very near the ceiling.

“Everard?” he said sharply. “And you too, Dilys!”

A sallow-faced wizard with short, black bangs and an elderly witch with long silver ringlets in the frame beside him, both of whom seemed to have been in the deepest of sleeps, opened their eyes immediately.

“You were listening?” said Dumbledore.

The wizard nodded, the witch said, “Naturally.”

“The man has red hair and glasses,” said Dumbledore. “Everard, you will need to raise the alarm, make sure he is found by the right people —”

Both nodded and moved sideways out of their frames, but instead of emerging in neighboring pictures (as usually happened at Hogwarts), neither reappeared; one frame now contained nothing but a backdrop of dark curtain, the other a handsome leather armchair. Harry noticed that many of the other headmasters and mistresses on the walls, though snoring and drooling most convincingly, kept sneaking peeks at him under their eyelids, and he suddenly understood who had been talking when they had knocked.

“Everard and Dilys were two of Hogwarts’s most celebrated Heads,” Dumbledore said,

の声が聞こえなかったかのように言った。  
「エバラードとディリスが戻るまでに数分はかかるじゃろう。マクゴナガル先生、椅子をもう少し出して下さらんか」  
マクゴナガル先生が、ガウンのポケットから杖を取り出して一振りすると、どこからともなく椅子が三脚現れた。  
背もたれのまっすぐな木の椅子で、ダンブルドアがハリーの尋問のときに取り出したあの座り心地のよさそうなチンツ張りの肘掛椅子とは大違いだった。  
ハリーは振り返ってダンブルドアを観察しながら腰掛けた。  
ダンブルドアは、指一本で、飾り羽のあるフォークスの金色の頭を撫でていた。  
不死鳥はたちまち目を覚まし、美しい頭を高々ともたげ、真っ黒なキラキラした目でダンブルドアを覗き込んだ。  
「見張りをしてくれるかの」ダンブルドアは不死鳥に向かって小声で言った。  
炎がパッと燃え、不死鳥は消えた。  
次にダンブルドアは、繊細な銀の道具を一つ、素早く拾い上げて机に運んできた。  
ハリーにはその道具が何をするものなのか、まったくわからなかった。  
ダンブルドアは再び三人と向き合って座り、道具を杖の先でそっと叩いた。  
道具はすぐさま独りで動きだし、リズムに乗ってチリンチリンと鳴った。  
てっぺんにある小さな銀の管から、薄緑色の小さな煙がポッポッと上がった。  
ダンブルドアは眉根を寄せて、煙をじっと観察した。  
数秒後、ポッポッという煙は連続的な流れになり、濃い煙が渦を巻いて昇った……蛇の頭がその先から現れ、口をかつと開いた。  
ハリーは、この道具が自分の話を確認してくれるのだろうかと考えながら、そうだという印がほしくて、ダンブルドアをじっと見つめたが、ダンブルドアは顔を上げなかった。  
「なるほど、なるほど」ダンブルドアは独り言を言っているようだった。  
驚いた様子をまったく見せず、煙の立ち昇るさまを観察している。  
「しかし、本質的に分離しておるか？」

now sweeping around Harry, Ron, and Professor McGonagall and approaching the magnificent sleeping bird on his perch beside the door. “Their renown is such that both have portraits hanging in other important Wizarding institutions. As they are free to move between their own portraits they can tell us what may be happening elsewhere. ...”

“But Mr. Weasley could be anywhere!” said Harry.

“Please sit down, all three of you,” said Dumbledore, as though Harry had not spoken. “Everard and Dilys may not be back for several minutes. ... Professor McGonagall, if you could draw up extra chairs ...”

Professor McGonagall pulled her wand from the pocket of her dressing gown and waved it; three chairs appeared out of thin air, straight-backed and wooden, quite unlike the comfortable chintz armchairs that Dumbledore had conjured back at Harry’s hearing. Harry sat down, watching Dumbledore over his shoulder. Dumbledore was now stroking Fawkes’s plumed golden head with one finger. The phoenix awoke immediately. He stretched his beautiful head high and observed Dumbledore through bright, dark eyes.

“We will need,” said Dumbledore very quietly to the bird, “a warning.”

There was a flash of fire and the phoenix had gone.

Dumbledore now swooped down upon one of the fragile silver instruments whose function Harry had never known, carried it over to his desk, sat down facing them again, and tapped it gently with the tip of his wand.

The instrument tinkled into life at once with rhythmic clinking noises. Tiny puffs of pale green smoke issued from the minuscule silver

ハリーはこれがどういう意味なのか、ちんぷんかんぷんだった。

しかし、煙の蛇はたちまち二つに裂け、二匹とも暗い空中にくねくねと立ち昇った。ダンブルドアは厳しい表情に満足の色を浮かべて、道具をもう一度杖でそっと叩いた。チリンチリンという音が緩やかになり、鳴りやんだ。煙の蛇はぼやけ、形のない霞となって消え去った。

ダンブルドアはその道具を、元の細い小さなテーブルに戻した。

ハリーは、歴代校長の肖像画の多くがダンブルドアを目で追っていることに気づいたが、ハリーに見られていることに気がつく、みんな慌ててまた寝たふりをするのだった。ハリーは、あの不思議な銀の道具が何をするものかと聞こうとしたが、その前に、右側の壁のてっぺんから大声がして、エバラードと呼ばれた魔法使いが、少し息を切らしながら自分の肖像画に戻ってきた。

「ダンブルドア！」

「どうじゃった？」ダンブルドアがすかさず聞いた。

「誰かが駆けつけてくるまで叫び続けましたよ」魔法使いは背景のカーテンで額の汗を拭いながら言った。

「下の階で何か物音がすると言ったのですがね——みんな半信半疑で、確かめに下りてきましたよ——ご存知のように、下の階には肖像画がないので、私は覗くことはできませんでしたがね。とにかく、まもなくみんながその男を運び出してきました。よくないですね。血だらけだった。もっとよく見ようと思ひましてね、出ていく一行を追いかけてエルフリーダ タラッグの肖像画に駆け込んだのですが——」

「ごくろう」ダンブルドアがそう言う間、ロンは堪えきれないように身動きした。

「なれば、ディリスが、その男の到着を見届けたじゃろう——」

まもなく、銀色の巻き毛の魔女も自分の肖像画に戻ってきた。咳き込みながら肘掛椅子に座り込んで、魔女が言った。

「ええ、ダンブルドア、みんながその男を聖マングに運び込みました。私の肖像画の前を

tube at the top. Dumbledore watched the smoke closely, his brow furrowed, and after a few seconds, the tiny puffs became a steady stream of smoke that thickened and coiled in the air. ... A serpent's head grew out of the end of it, opening its mouth wide. Harry wondered whether the instrument was confirming his story: He looked eagerly at Dumbledore for a sign that he was right, but Dumbledore did not look up.

“Naturally, naturally,” murmured Dumbledore apparently to himself, still observing the stream of smoke without the slightest sign of surprise. “But in essence divided?”

Harry could make neither head nor tail of this question. The smoke serpent, however, split itself instantly into two snakes, both coiling and undulating in the dark air. With a look of grim satisfaction Dumbledore gave the instrument another gentle tap with his wand: The clinking noise slowed and died, and the smoke serpents grew faint, became a formless haze, and vanished.

Dumbledore replaced the instrument upon its spindly little table; Harry saw many of the old headmasters in the portraits follow him with their eyes, then, realizing that Harry was watching them, hastily pretend to be sleeping again. Harry wanted to ask what the strange silver instrument was for, but before he could do so, there was a shout from the top of the wall to their right; the wizard called Everard had reappeared in his portrait, panting slightly.

“Dumbledore!”

“What news?” said Dumbledore at once.

“I yelled until someone came running,” said the wizard, who was mopping his brow on the curtain behind him, “said I’d heard something moving downstairs — they weren’t sure

運ばれていきましたよ——ひどい状態のよう  
です……」

「ごくろうじゃった」ダンブルドアはマクゴ  
ナガル先生のほうを見た。

「ミネルバ、ウィーズリーの子どもたちを起  
こしてきておくれ」

「わかりました……」

マクゴナガル先生は立ち上がって、素早く扉  
に向かった。

ハリーは横目でちらりとロンを見た。ロンは  
怯えた顔をしていた。

「それで、ダンブルドア——モリーはどうし  
ますか？」

マクゴナガル先生が扉の前で立ち止まって聞  
いた。

「それは、近づくものを見張る役目を終えた  
後の、フォークスの仕事じゃ」ダンブルドア  
が答えた。

「しかし、もう知っておるかもしれん……あ  
のすばらしい時計が……」

ダンブルドアは、時間ではなく、ウィーズリ  
ー家の一人ひとりがどこでどうしているかを  
知らせるあの時計のことを言っているのだ  
と、ハリーにはわかった。

ウィーズリーおじさんの針が、いまでも「命が  
危ない」を指しているに違いないと思うと、  
ハリーは胸が痛んだ。

しかし、もう真夜中だ。ウィーズリーおばさ  
んはたぶん眠っていて、時計を見ていないだ  
ろう。

まね妖怪がウィーズリーおじさんの死体に変  
身したのを見たときのおばさんのことを思い  
出すと、ハリーは体が凍るような気持ちだっ  
た。

メガネがずれ、顔から血を流しているおじさ  
んの姿だった……だけど、ウィーズリーおじ  
さんは死ぬもんか……死ぬはずがない……。  
ダンブルドアは今度はハリーとロンの背後に  
ある戸棚をゴソゴソ掻き回していた。

中から黒ずんだ古いヤカンを取り出し、机の  
上にそっと置くと、ダンブルドアは杖を上げ  
て「ポータス！」と唱えた。

ヤカンが一瞬震え、奇妙な青い光を発した。  
そして震えが止まると、元どおりの黒さだっ  
た。

whether to believe me but went down to check  
— you know there are no portraits down there  
to watch from. Anyway, they carried him up a  
few minutes later. He doesn't look good, he's  
covered in blood, I ran along to Elfrida Cragg's  
portrait to get a good view as they left —”

“Good,” said Dumbledore as Ron made a  
convulsive movement, “I take it Dilys will  
have seen him arrive, then —”

And moments later, the silver-ringletted  
witch had reappeared in her picture too; she  
sank, coughing, into her armchair and said,  
“Yes, they've taken him to St. Mungo's,  
Dumbledore. ... They carried him past under  
my portrait. ... He looks bad. ...”

“Thank you,” said Dumbledore. He looked  
around at Professor McGonagall.

“Minerva, I need you to go and wake the  
other Weasley children.”

“Of course. ...”

Professor McGonagall got up and moved  
swiftly to the door; Harry cast a sideways  
glance at Ron, who was now looking terrified.

“And Dumbledore — what about Molly?”  
said Professor McGonagall, pausing at the  
door.

“That will be a job for Fawkes when he has  
finished keeping a lookout for anybody  
approaching,” said Dumbledore. “But she may  
already know ... that excellent clock of  
hers ...”

Harry knew Dumbledore was referring to  
the clock that told, not the time, but the  
whereabouts and conditions of the various  
Weasley family members, and with a pang he  
thought that Mr. Weasley's hand must, even  
now, be pointing at “mortal peril.” But it was  
very late. ... Mrs. Weasley was probably  
asleep, not watching the clock. ... And he felt

ダンブルドアはまた別な肖像画に歩み寄った。

こんどは尖った山羊ひげの、賢しそうな魔法使いだ。

スリザリン カラーの縁と銀のローブを着た姿に描かれた肖像画は、どうやらぐっすり眠っているらしく、ダンブルドアが声をかけても聞こえないようだった。

「フィニアス、フィニアス」

部屋に並んだ肖像画の主たちは眠ったふりをやめ、状況をよく見ようと、それぞれの額の中でもぞもぞ動いていた。

賢しそうな魔法使いがまだ狸寝入りを続けているので、何人かが一緒に大声で名前を呼んだ。

「フィニアス！ フィニアス！ フィニアス！」

もはや眠ったふりはできなかった。

芝居がかった身振りでぎくりとし、その魔法使いは目を見開いた。

「誰か呼んだかね？」

「フィニアス。あなたの別の肖像画を、もう一度訪ねてほしいのじゃ」ダンブルドアが言った。

「また伝言があるのでな」

「私の別な肖像画を？」甲高い声でそう言うと、フィニアスはゆっくりと嘘欠伸をした。フィニアスの目が部屋をぐると見回し、ハリーのところで止まった。

「いや、ご勘弁願いたいね、ダンブルドア、今夜はとても疲れている」

フィニアスの声には聞き覚えがある。いったいどこで聞いたのだろうか？ しかし、ハリーが思い出す前に、壁の肖像画たちが轟々たる非難の声をあげた。

「貴殿は不服従ですぞ！」赤鼻の、でっぴりした魔法使いが、両手の拳を振り回した。

「職務放棄じゃ！」

「我々には、 hogwarts の現職校長に仕えるという盟約がある！」ひ弱そうな年老いた魔法使いが叫んだ。

ダンブルドアの前任者のアルマンド ディベットだと、ハリーは知っていた。

「フィニアス、恥を知れ！」

「私が説得しましょうか？ ダンブルドア？」

cold as he remembered Mrs. Weasley's boggart turning into Mr. Weasley's lifeless body, his glasses askew, blood running down his face. ... But Mr. Weasley wasn't going to die. ... He couldn't. ...

Dumbledore was now rummaging in a cupboard behind Harry and Ron. He emerged from it carrying a blackened old kettle, which he placed carefully upon his desk. He raised his wand and murmured “*Portus*”; for a moment the kettle trembled, glowing with an odd blue light, then it quivered to a rest, as solidly black as ever.

Dumbledore marched over to another portrait, this time of a clever-looking wizard with a pointed beard, who had been painted wearing the Slytherin colors of green and silver and was apparently sleeping so deeply that he could not hear Dumbledore's voice when he attempted to rouse him.

“Phineas. *Phineas*.”

And now the subjects of the portraits lining the room were no longer pretending to be asleep; they were shifting around in their frames, the better to watch what was happening. When the clever-looking wizard continued to feign sleep, some of them shouted his name too.

“Phineas! *Phineas*! PHINEAS!”

He could not pretend any longer; he gave a theatrical jerk and opened his eyes wide.

“Did someone call?”

“I need you to visit your other portrait again, Phineas,” said Dumbledore. “I've got another message.”

“Visit my other portrait?” said Phineas in a reedy voice, giving a long, fake yawn (his eyes traveling around the room and focusing upon Harry). “Oh no, Dumbledore, I am too tired



鋭い目つきの魔女が、生徒の仕置きに使うカバの木の棒ではないかと思われる、異常に太い杖を持ち上げながら言った。

「ああ、わかりましたよ」フィニアスと呼ばれた魔法使いが、少し心配そうに杖に目をやった。

「ただ、あいつがもう、私の肖像画を破棄してしまったかもしれませんがね。なにしろあいつは、家族のほとんどの——」

「シリウスは、あなたの肖像画を処分すべきでないことを知っておる」ダンブルドアの言葉で、とたんにハリーは、フィニアスの声をどこで聞いたのかを思い出した。

グリモールド プレイスのハリーの寝室にあった、一見何の絵も入っていない額縁から聞こえていたあの声だ。

「シリウスに伝言するのじゃ。『アーサー・ウィーズリーが重傷で、妻、子どもたち、ハリー・ポッターが間もなくそちらの家に到着する』よいかな？」

「アーサー・ウィーズリー負傷、妻子とハリー・ポッターがあちらに滞在」

フィニアスが気乗りしない調子で復唱した。

「はい、はい……わかりましたよ……」

この魔法使いが額縁に潜り込み、姿を消したとたん、再び扉が開き、フレッド、ジョージ、ジニーがマクゴナガル先生に導かれて入ってきた。

三人とも、ぼさぼさ頭にパジャマ姿で、ショックを受けていた。

「ハリー——いったいどうしたの？」ジニーが恐怖の面持ちで聞いた。

「マクゴナガル先生は、あなたが、パパの怪我するところを見たっておっしゃるの——」

「お父上は、『不死鳥の騎士団』の任務中に怪我をなさったのじゃ」

ハリーが答えるより先に、ダンブルドアが言った。

「お父上は、もう『聖マンガ魔法疾患傷害病院』に運び込まれておる。きみたちをシリウスの家に送ることにした。病院へはそのほうが「隠れ穴」よりずっと便利じゃからの。お母上とは向こうで会える」

「どうやって行くんですか？」フレッドも動揺していた。

tonight. ...”

Something about Phineas’s voice was familiar to Harry. Where had he heard it before? But before he could think, the portraits on the surrounding walls broke into a storm of protest.

“Insubordination, sir!” roared a corpulent, red-nosed wizard, brandishing his fists. “Dereliction of duty!”

“We are honor-bound to give service to the present Headmaster of Hogwarts!” cried a frail-looking old wizard whom Harry recognized as Dumbledore’s predecessor, Armando Dippet. “Shame on you, Phineas!”

“Shall I persuade him, Dumbledore?” called a gimlet-eyed witch, raising an unusually thick wand that looked not unlike a birch rod.

“Oh, very *well*,” said the wizard called Phineas, eyeing this wand slightly apprehensively, “though he may well have destroyed my picture by now, he’s done most of the family —”

“Sirius knows not to destroy your portrait,” said Dumbledore, and Harry realized immediately where he had heard Phineas’s voice before: issuing from the apparently empty frame in his bedroom in Grimmauld Place. “You are to give him the message that Arthur Weasley has been gravely injured and that his wife, children, and Harry Potter will be arriving at his house shortly. Do you understand?”

“Arthur Weasley, injured, wife and children and Harry Potter coming to stay,” recited Phineas in a bored voice. “Yes, yes ... very well. ...”

He sloped away into the frame of the portrait and disappeared from view at the very moment that the study door opened again.

「暖炉飛行粉で？」  
「いや」ダンブルドアが言った。  
「暖炉飛行粉は、現在、安全ではない。『煙突綱』が見張られておる。移動キーに来るのじゃ」  
ダンブルドアは、何食わぬ顔で机に載っているふるいやカンを指した。  
「いまはフィニアス ナイジェラスが戻って報告するのを待っているところじゃ……きみたちを送り出す前に、安全の確認をしておきたいのでな——」  
一瞬、部屋の真ん中に炎が燃え上がり、その場に一枚の金色の羽がひらひらと舞い降った。  
「フォークスの警告じゃ」ダンブルドアが空中で羽を捕まえながら言った。  
「アンブリッジ先生が、君たちがベッドを抜け出したことに気づいたに違いない……ミネルバ、行って足止めしてくだされ——適当な作り話でもして——」  
マクゴナガル先生が、タータンを翻して出ていった。  
「あいつは、喜んでと言っておりますぞ」ダンブルドアの背後で、気乗りしない声がした。  
フィニアスと呼ばれた魔法使いの姿がスリザリン寮旗の前に戻っていた。  
「私の曾々孫は、家に迎える客に関して、昔からおかしな趣味を持っていた」  
「さあ、ここに来るのじゃ」ダンブルドアがハリーとウィーズリーたちを呼んだ。  
「急いで。邪魔が入らぬうちに」  
ハリーもウィーズリー兄弟妹も、ダンブルドアの机の周りに集まった。  
「移動キーは使ったことがあるじゃろな？」  
ダンブルドアの問いにみんなが頷き、手を出して黒ずんだヤカンに触れた。  
「よかろう。では、三つ数えて……一……二……」  
ダンブルドアが三つ目を数え上げるまでのほんの一瞬、ハリーはダンブルドアを見上げた——二人は触れ合うほど近くにいた——ダンブルドアの明るいブルーの眼差しが、移動キーからハリーの顔へと移った。  
たちまち、ハリーの傷痕が灼熱した。

Fred, George, and Ginny were ushered inside by Professor McGonagall, all three of them looking disheveled and shocked, still in their night things.

“Harry — what’s going on?” asked Ginny, who looked frightened. “Professor McGonagall says you saw Dad hurt —”

“Your father has been injured in the course of his work for the Order of the Phoenix,” said Dumbledore before Harry could speak. “He has been taken to St. Mungo’s Hospital for Magical Maladies and Injuries. I am sending you back to Sirius’s house, which is much more convenient for the hospital than the Burrow. You will meet your mother there.”

“How’re we going?” asked Fred, looking shaken. “Floo powder?”

“No,” said Dumbledore, “Floo powder is not safe at the moment, the Network is being watched. You will be taking a Portkey.” He indicated the old kettle lying innocently on his desk. “We are just waiting for Phineas Nigellus to report back. ... I wish to be sure that the coast is clear before sending you —”

There was a flash of flame in the very middle of the office, leaving behind a single golden feather that floated gently to the floor.

“It is Fawkes’s warning,” said Dumbledore, catching the feather as it fell. “She must know you’re out of your beds. ... Minerva, go and head her off — tell her any story —”

Professor McGonagall was gone in a swish of tartan.

“He says he’ll be delighted,” said a bored voice behind Dumbledore; the wizard called Phineas had reappeared in front of his Slytherin banner. “My great-great-grandson has always had odd taste in houseguests. ...”

“Come here, then,” Dumbledore said to

まるで傷口がまたパツクリと開いたかのようだった——望んでもいないのに独りでに、恐ろしいほど強烈に、内側から憎しみが湧き上がってきた。

あまりの激しさに、ハリーはその瞬間、ただ襲撃することしか考えられなかった——噛みたい——二本の牙を目の前にいるこの男にグサリと刺してやりたい——。

「……三」

臍の裏がぐいっと引っ張られるのを感じた。足下の床が消え、手がヤカンに貼りついて急速に前進しながら、互いに体がぶつかった。色が渦巻き、風が唸る中を、前へ前へとヤカンがみんなを引っ張っていく……。

やがて、膝ががくっと折れるほどの勢いで、ハリーの足が地面を強く打った。

ヤカンが落ちてカタカタと鳴り、どこか近くで声がした。

「戻ってきた。血を裏切るガキどもが。父親が死にかけてるといのは本当なのか？」

「出ていけ！」別の声が吼えた。

ハリーは急いで立ち上がり、あたりを見回した。

到着したのは、グリモールド プレイス十二番地の薄暗い地下の厨房だった。

明かりといえば、暖炉の火と消えかかった蠟燭一本だけだ。

それが、孤独な夕食の食べ残しを照らしていた。

クリーチャーは、ドアから玄関ホールへと出ていくところだったが、腰布をずり上げながら振り返り、毒を含んだ目つきでみんなを見た。

心配そうな顔のシリウスが、急ぎ足でやって来た。

ひげも剃らず、昼間の服装のままだ。

その上、マンダンガスのような、どこか酒臭い饅えた臭いを漂わせていた。

「どうしたんだ？」ジニーを助け起こしながら、シリウスが聞いた。

「フィニアス ナイジェラスは、アーサーがひどい怪我をしたと言っていたが——」

「ハリーに聞いて」フレッドが言った。

「そうだ。俺もそれが聞きたい」ジョージが言った。

Harry and the Weasleys. “And quickly, before anyone else joins us ...”

Harry and the others gathered around Dumbledore’s desk.

“You have all used a Portkey before?” asked Dumbledore, and they nodded, each reaching out to touch some part of the blackened kettle. “Good. On the count of three then ... one ... two ...”

It happened in a fraction of a second: In the infinitesimal pause before Dumbledore said “three,” Harry looked up at him — they were very close together — and Dumbledore’s clear blue gaze moved from the Portkey to Harry’s face.

At once, Harry’s scar burned white-hot, as though the old wound had burst open again — and unbidden, unwanted, but terrifyingly strong, there rose within Harry a hatred so powerful he felt, for that instant, that he would like nothing better than to strike — to bite — to sink his fangs into the man before him —

“... three.”

He felt a powerful jerk behind his navel, the ground vanished from beneath his feet, his hand was glued to the kettle; he was banging into the others as all sped forward in a swirl of colors and a rush of wind, the kettle pulling them onward and then —

His feet hit the ground so hard that his knees buckled, the kettle clattered to the ground and somewhere close at hand a voice said, “Back again, the blood traitor brats, is it true their father’s dying ... ?”

“OUT!” roared a second voice.

Harry scrambled to his feet and looked around; they had arrived in the gloomy basement kitchen of number twelve, Grimmauld Place. The only sources of light

双子とジニーがハリーを見つめていた。厨房の外の階段で、クリーチャーの足音が止まった。

「それはー」ハリーが口を開いた。マクゴナガルやダンブルドアに話すよりずっと厄介だった。

「僕は見たんだ！ 一種のー幻をー」そしてハリーは、自分が見たことを全員に話して聞かせた。

ただ、話を変えて、蛇が襲ったとき、自分は蛇自身の目からではなく、傍で見ていたような言い方をした。

ロンはまだ蒼白だったが、ちらりとハリーを見た。しかし、何も言わなかった。

話し終えても、フレッド、ジョージ、ジニーは、まだしばらくハリーを見つめていた。気のせいか、三人がどこか非難するような目つきをしているように思えた。

「ママは来てる？」フレッドがシリウスに聞いた。

「たぶんまだ、何が起こったかさえ知らないだろう」シリウスが言った。

「アンブリッジの邪魔が入る前に君たちを逃がすことが大事だったんだ。いまごろはダンブルドアが、モリーに知らせる手配をしているだろう」

「聖マンガに行かなくちゃ」ジニーが急き込んで言った。

兄たちを見回したが、もちろんみんなパジャマ姿だ。

「シリウス、マントか何か貸してくれない？」

「まあ、待て。聖マンガにすっ飛んで行くわけにはいかない」シリウスが言った。

「俺たちが行きたいならむろん行けるさ。聖マンガに」フレッドが強情な顔をした。

「俺たちの親父だ！」

「アーサーが襲われたことを、病院から奥さんにも知らせていないのに、君たちが知っているなんて、じゃあ、どう説明するつもりだ？」

「そんなことどうでもいいだろ？」ジョージがむきになった。

「よくはない。何百キロも離れたところの出来事をハリーが見ているという事実、注意

were the fire and one guttering candle, which illuminated the remains of a solitary supper. Kreacher was disappearing through the door to the hall, looking back at them malevolently as he hitched up his loincloth; Sirius was hurrying toward them all, looking anxious. He was unshaven and still in his day clothes; there was also a slightly Mundungus-like whiff of stale drink about him.

“What’s going on?” he said, stretching out a hand to help Ginny up. “Phineas Nigellus said Arthur’s been badly injured —”

“Ask Harry,” said Fred.

“Yeah, I want to hear this for myself,” said George.

The twins and Ginny were staring at him. Kreacher’s footsteps had stopped on the stairs outside.

“It was —” Harry began; this was even worse than telling McGonagall and Dumbledore. “I had a — a kind of — vision. ...”

And he told them all that he had seen, though he altered the story so that it sounded as though he had watched from the sidelines as the snake attacked, rather than from behind the snake’s own eyes. ... Ron, who was still very white, gave him a fleeting look, but did not speak. When Harry had finished, Fred, George, and Ginny continued to stare at him for a moment. Harry did not know whether he was imagining it or not, but he fancied there was something accusatory in their looks. Well, if they were going to blame him for just seeing the attack, he was glad he had not told them that he had been inside the snake at the time. ...

“Is Mum here?” said Fred, turning to Sirius.

“She probably doesn’t even know what’s

を引きたくない！」シリウスが声を荒らげた。

「そういう情報を、魔法省がどう解釈するか、君たちにはわかっているのか？」フレッドとジョージは、魔法省が何をどうしようが知ったことかという顔をした。ロンは血の気のない顔で黙っていた。ジニーが言った。

「誰かほかの人が教えてくれたかもしれないし……ハリーじゃなくて、どこか別のところから聞いたかもしれないじゃない」

「誰から？」シリウスがもどかしげに言った。

「いいか、君たちの父さんは、騎士団の任務中に負傷したんだ。それだけでも十分状況が怪しいのに、その上、子どもたちが事件直後にそれを知っていたとなれば、ますます怪しい。君たちが騎士団に重大な損害を与えることにもなりかねない——」

「騎士団なんかクソ食らえ！」フレッドが大声を出した。

「俺たちの親父が死にかけてるんだ！」ジョージも叫んだ。

「君たちの父さんは、自分の任務を承知していた。騎士団のためにも、君たちが事を台無しにしたら、父さんが喜ぶと思うか！」シリウスも同じぐらいに怒っていた。

「まさにこれだ——だから君たちは騎士団に入れないんだ——君たちはわかっていない——世の中には死んでもやらなければならないことがあるんだ！」

「口で言うのは簡単さ。ここに閉じこもって！」フレッドが怒鳴った。

「そっちの首は懸かってないじゃないか！」シリウスの顔にわずかに残っていた血の気がさっと消えた。

一瞬、フレッドをぶん殴りたいように見えた。

しかし、口を開いたとき、その声は決然として静かだった。

「辛いのはわかる。しかし、我々全員が、まだ何も知らないかのように行動しなければならないんだ。少なくとも、君たちの母さんから連絡があるまでは、ここにじっとしていなければならない。いいか？」

happened yet,” said Sirius. “The important thing was to get you away before Umbridge could interfere. I expect Dumbledore’s letting Molly know now.”

“We’ve got to go to St. Mungo’s,” said Ginny urgently. She looked around at her brothers; they were of course still in their pajamas. “Sirius, can you lend us cloaks or anything — ?”

“Hang on, you can’t go tearing off to St. Mungo’s!” said Sirius.

“ ‘Course we can go to St. Mungo’s if we want,” said Fred, with a mulish expression, “he’s our dad!”

“And how are you going to explain how you knew Arthur was attacked before the hospital even let his wife know?”

“What does that matter?” said George hotly.

“It matters because we don’t want to draw attention to the fact that Harry is having visions of things that are happening hundreds of miles away!” said Sirius angrily. “Have you any idea what the Ministry would make of that information?”

Fred and George looked as though they could not care less what the Ministry made of anything. Ron was still white-faced and silent. Ginny said, “Somebody else could have told us. ... We could have heard it somewhere other than Harry. ...”

“Like who?” said Sirius impatiently. “Listen, your dad’s been hurt while on duty for the Order and the circumstances are fishy enough without his children knowing about it seconds after it happened, you could seriously damage the Order’s —”

“We don’t care about the dumb Order!” shouted Fred.

フレッドとジョージは、それでもまだ反抗的な顔だったが、ジニーは、手近の椅子に向かって二、三歩歩き、崩れるように座った。ハリーがロンの顔を見ると、ロンは頷くとも肩をすくめるともつかないおかしい動きを見せた。

そしてハリーは尊敬の眼差しでシリウスを見た。自制心というのはこういう事なのか。ハリーとロンも座り、双子はそれからしばらくシリウスを睨みつけていたが、やがてジニーを挟んで座った。

「それでいい」シリウスが励ますように言った。

「さあ、みんなで……みんなで何か飲みながら待とう。『アクシオ！ バタービールよ、来い！』」

シリウスが杖を上げて呪文を唱えると、バタービールが六本、食料庫から飛んできて、テーブルの上を滑り、シリウスの食べ残しを蹴散らし、六人の前でぴたりと止まった。

みんなが飲んだ。

しばらくは暖炉の火がパチパチ爆ぜる音と、瓶をテーブルに置くコトリという音だけが聞こえた。

ハリーは、何かしていないと堪らないので飲んでいただけだった。

胃袋は恐ろしい、煮えたぎるような罪悪感で一杯だった。

みんながここにいるのは僕のせいだ。みんなまだベッドで眠っているはずだったのに。警報を発したからこそウィーズリーおじさんが見つかったのだと自分に言い聞かせても、何の役にも立たなかった。

そもそもウィーズリー氏を襲ったのは自分自身だという、厄介な事実からは逃れられなかった。

いいかげんにしろ。お前には牙なんて無い。ハリーは自分に言い聞かせ、落ち着こうとしていた。

しかし、バタービールを持つ手が震えていた。

お前はベッドに横になっていた。誰も襲っち

“It’s our dad dying we’re talking about!” yelled George.

“Your father knew what he was getting into, and he won’t thank you for messing things up for the Order!” said Sirius angrily in his turn. “This is how it is — this is why you’re not in the Order — you don’t understand — there are things worth dying for!”

“Easy for you to say, stuck here!” bellowed Fred. “I don’t see you risking your neck!”

The little color remaining in Sirius’s face drained from it. He looked for a moment as though he would quite like to hit Fred, but when he spoke, it was in a voice of determined calm. “I know it’s hard, but we’ve all got to act as though we don’t know anything yet. We’ve got to stay put, at least until we hear from your mother, all right?”

Fred and George still looked mutinous. Ginny, however, took a few steps over to the nearest chair and sank into it. Harry looked at Ron, who made a funny movement somewhere between a nod and shrug, and they sat down too. The twins glared at Sirius for another minute, then took seats on either side of Ginny.

“That’s right,” said Sirius encouragingly, “come on, let’s all ... let’s all have a drink while we’re waiting. *Accio Butterbeer!*”

He raised his wand as he spoke and half a dozen bottles came flying toward them out of the pantry, skidded along the table, scattering the debris of Sirius’s meal, and stopped neatly in front of the six of them. They all drank, and for a while the only sounds were those of the crackling of the kitchen fire and the soft thud of their bottles on the table.

Harry was only drinking to have something to do with his hands. His stomach was full of horrible hot, bubbling guilt. They would not be

やいない……。

しかし、ダンブルドアの部屋で起こった事は  
なんだったんだ？

ハリーは自問自答した。

僕はダンブルドアまでも襲いたくなった…  
…。

ハリーは瓶をテーブルに置いたが、思わず力  
が入りビールがテーブルにこぼれた。

誰も気がつかない。

そのとき空中に炎が上がり、目の前の汚れた  
皿を照らし出した。

みんなが驚いて声をあげる中、羊皮紙が一  
巻、ドサリとテーブルに落ち、黄金の不死鳥  
の尾羽根も一枚落ちてきた。

「フォークス！」

そう言うなり、シリウスが羊皮紙をさっと取  
り上げた。

「ダンブルドアの筆跡ではないー君たちの  
母さんからの伝言に違いないーさあー」  
シリウスが手紙をジョージの手に押しつけ、  
ジョージが引きちぎるようにそれを広げて読  
み上げた。

お父さまはまだ生きています。母さんは聖マ  
ンゴに行くところです。じっとしているので  
すよ。できるだけ早く知らせを送ります。  
ママより

ジョージがテーブルを見回した。

「まだ生きてる…？」ゆっくりと、ジョージ  
が言った。

「だけど、それじゃ、まるで……」最後まで  
言わなくてもわかった。

ハリーもそう思った。まるでウィーズリーお  
じさんが、生死の境を彷徨っているような言  
い方だ。

ロンは相変わらずひどく蒼い顔で、母親の手  
紙の裏を見つめていた。

まるで、そこに慰めの言葉を求めているかの  
ようだった。

フレッドはジョージの手から羊皮紙を引った

here if it were not for him; they would all still  
be asleep in bed. And it was no good telling  
himself that by raising the alarm he had  
ensured that Mr. Weasley was found, because  
there was also the inescapable business of it  
being he who had attacked Mr. Weasley in the  
first place. ...

*Don't be stupid, you haven't got fangs, he  
told himself, trying to keep calm, though the  
hand on his butterbeer bottle was shaking. You  
were lying in bed, you weren't attacking  
anyone. ...*

*But then, what just happened in  
Dumbledore's office? he asked himself. I felt  
like I wanted to attack Dumbledore too. ...*

He put the bottle down on the table a little  
harder than he meant to, so that it slopped over  
onto the table. No one took any notice. Then a  
burst of fire in midair illuminated the dirty  
plates in front of them and as they gave cries of  
shock, a scroll of parchment fell with a thud  
onto the table, accompanied by a single golden  
phoenix tail feather.

“Fawkes!” said Sirius at once, snatching up  
the parchment. “That’s not Dumbledore’s  
writing — it must be a message from your  
mother — here —”

He thrust the letter into George’s hand, who  
ripped it open and read aloud, “*Dad is still  
alive. I am setting out for St. Mungo’s now.  
Stay where you are. I will send news as soon as  
I can. Mum.*”

George looked around the table.

“Still alive ...” he said slowly. “But that  
makes it sound ...”

He did not need to finish the sentence. It  
sounded to Harry too as though Mr. Weasley  
was hovering somewhere between life and  
death. Still exceptionally pale, Ron stared at

くり、自分で読んだ。

それからハリーを見た。

ハリーはバタービールを持つ手が、また震えだすのを感じ、震えを止めようと、一層固く握り締めた。

こんなに長い夜をまんじりともせずに過ごしたことがあったろうか……ハリーの記憶にはなかった。

シリウスが、言うだけは言ってみようという調子で、ベッドで寝てはどうかと一度だけ提案したが、ウィーズリー兄弟妹の嫌悪の目つきだけで、答えは明らかだった。

全員がほとんど黙りこくってテーブルを囲み、時々バタービールの瓶を口元に遊びながら、蠟燭の芯が、溶けた蠟溜まりにだんだん沈んでいくのを眺めていた。

話すことといえば、時間を確かめ合うとか、どうなっているんだろうと口に出すとか、ウィーズリー夫人がとくに聖マンガに着いていたのだから、悪いことが起こっていれば、すでにそういう知らせが来ていたはずだと、互いに確認し合ったりするばかりだった。フレッドがとろっと眠り、頭が傾いで肩についた。

ジニーは椅子の上で猫のように丸まっていたが、目はしっかり開いていた。

そこに暖炉の火が映っているのを、ハリーは見た。ロンは両手で頭を抱えて座っていた。眠っているのか起きているのかわからない。家族の悲しみを前に、よそ者のハリーとシリウスは二人で幾度となく顔を見合わせた。そして待った……ひたすら待った……。

ロンの腕時計で明け方の五時十分過ぎ、厨房の戸がパッと開き、ウィーズリーおばさんが入ってきた。

ひどく蒼ざめてはいたが、みんなが一斉に顔を向け、フレッド、ロン、ハリーが椅子から腰を浮かせたとき、おばさんは力なく微笑んだ。

「大丈夫ですよ」おばさんの声は、疲れきって弱々しかった。

「お父さまは眠っています。あとでみんなで面会に行きましょう。いまは、ビルが看ています。午前中、仕事を休む予定でね」

フレッドは両手で顔を覆い、ドサリと椅子に

the back of his mother's letter as though it might speak words of comfort to him. Fred pulled the parchment out of George's hands and read it for himself, then looked up at Harry, who felt his hand shaking on his butterbeer bottle again and clenched it more tightly to stop the trembling.

If Harry had ever sat through a longer night than this one he could not remember it. Sirius suggested once that they all go to bed, but without any real conviction, and the Weasleys' looks of disgust were answer enough. They mostly sat in silence around the table, watching the candle wick sinking lower and lower into liquid wax, now and then raising bottles to their lips, speaking only to check the time, to wonder aloud what was happening, and to reassure one another that if there was bad news, they would know straightaway, for Mrs. Weasley must long since have arrived at St. Mungo's.

Fred fell into a doze, his head sagging sideways onto his shoulder. Ginny was curled like a cat on her chair, but her eyes were open; Harry could see them reflecting the firelight. Ron was sitting with his head in his hands, whether awake or asleep it was impossible to tell. And he and Sirius looked at each other every so often, intruders upon the family grief, waiting ... waiting ...

And then, at ten past five in the morning by Ron's watch, the kitchen door swung open and Mrs. Weasley entered the kitchen. She was extremely pale, but when they all turned to look at her, Fred, Ron, and Harry half-rising from their chairs, she gave a wan smile.

"He's going to be all right," she said, her voice weak with tiredness. "He's sleeping. We can all go and see him later. Bill's sitting with him now, he's going to take the morning off



戻った。

ジョージとジニーは立ち上がり、急いで母親に近寄って抱きついた。

ロンはへなへたと笑い、残っていたバタービールを一気に飲み干した。

「朝食だ！」シリウスが勢いよく立ち上がり、うれしそうに大声で言った。

「あのいまましいしもべ妖精はどこだ？ クリーチャー！ クリーチャー！」

しかしクリーチャーは呼び出しに応じなかった。

「それなら、それでいい」シリウスはそう言うのと、人数を数えはじめた。

「それじゃ、朝食は——ええと——七人か… …ベーコンエッグだな。それと紅茶にトーストと——」

ハリーは手伝おうと調理台のほうに急いだ。ウィーズリー一家の幸せを邪魔してはいけないと思った。

それに、ウィーズリーおばさんから、自分の見たことを話すようにと言われる瞬間が怖かった。

ところが、食器棚から皿を取り出すや否や、おばさんがハリーの手からそれを取り上げ、ハリーをひしと抱き寄せた。

「ハリー、あなたがいなかったらどうなっていたかわからないわ」おばさんはくぐもった声で言った。

「アーサーを見つけるまでに何時間も経っていたかもしれない。そうしたら手遅れだったわ。でも、あなたのおかげで命が助かったし、ダンブルドアはアーサーがなぜあそこにいたかを、うまく言い繕う話を考えることもできたわ。そうじゃなかったら、どんなに大変なことになっていたか。かわいそうなスタージスみたいに……」

ハリーはおばさんの感謝にいたたまれない気持だった。

幸いなことに、おばさんはすぐハリーを放し、シリウスに向かって、一晩中子供たちを見ていてくれたことに礼を述べた。

シリウスは役に立ってうれしいし、ウィーズリー氏が入院中は、全員がこの屋敷に留まってほしいと答えた。

「まあ、シリウス、とてもありがたいわ……

work.”

Fred fell back into his chair with his hands over his face. George and Ginny got up, walked swiftly over to their mother, and hugged her. Ron gave a very shaky laugh and downed the rest of his butterbeer in one.

“Breakfast!” said Sirius loudly and joyfully, jumping to his feet. “Where’s that accursed house-elf? Kreacher! KREACHER!”

But Kreacher did not answer the summons.

“Oh, forget it, then,” muttered Sirius, counting the people in front of him. “So it’s breakfast for — let’s see — seven … Bacon and eggs, I think, and some tea, and toast —”

Harry hurried over to the stove to help. He did not want to intrude upon the Weasleys’ happiness, and he dreaded the moment when Mrs. Weasley would ask him to recount his vision. However, he had barely taken plates from the dresser when Mrs. Weasley lifted them out of his hands and pulled him into a hug.

“I don’t know what would have happened if it hadn’t been for you, Harry,” she said in a muffled voice. “They might not have found Arthur for hours, and then it would have been too late, but thanks to you he’s alive and Dumbledore’s been able to think up a good cover story for Arthur being where he was, you’ve no idea what trouble he would have been in otherwise, look at poor Sturgis. …”

Harry could hardly stand her gratitude, but fortunately she soon released him to turn to Sirius and thank him for looking after her children through the night. Sirius said that he was very pleased to have been able to help, and hoped they would all stay with him as long as Mr. Weasley was in hospital.

“Oh, Sirius, I’m so grateful. … They think

アーサーはしばらく入院することになると言われたし、なるべく近くにいられたら助かるわ……その場合は、もちろん、クリスマスをここで過ごすことになるかもしれないけれど」

「大勢のほうが楽しいよ！」シリウスが心からそう思っている声だったので、ウィーズリーおばさんはシリウスに向かってにっこりし、手早くエプロンを掛けて朝食の支度を手伝いはじめた。

「シリウス」ハリーは切羽詰まった気持ちで囁いた。

「ちょっと話があるんだけど、いい？ あのーいますぐ、いい？」

ハリーは暗い食料庫に入っていった。シリウスが従いてきた。

ハリーは何の前置きもせずに、名付け親に、自分の見た光景を詳しく話して聞かせた。自分自身がウィーズリー氏を襲った蛇だったことも話した。一息ついたとき、シリウスが聞いた。

「そのことをダンブルドアに話したか？」

「うん」ハリーは焦れったように言った。

「だけど、ダンブルドアはそれがどういう意味なのか教えてくれなかった。まあ、ダンブルドアはもう僕に何にも話してくれないんだけど」

「何か心配するべきことだったら、きっと君に話してくれていたはずだ」シリウスは落ち着いていた。

「だけど、それだけじゃないんだ」ハリーがほとんど囁きに近い小声で言った。

「シリウス、僕……僕、頭がおかしくなってるんじゃないかと思うんだ。ダンブルドアの部屋で、移動キーに乗る前だけど……ほんの一瞬、僕は蛇になったと思った。そう感じたんだーダンブルドアを見たとき、傷痕がすごく痛くなったーシリウス、僕、ダンブルドアを襲いたくなかったんだ！」

ハリーには、シリウスの顔のほんの一部しか見えなかった。あとは暗闇だった。

「幻を見たことが尾を引いていたんだろう。

それだけだよ」シリウスが言った。

「夢だったのかどうか分からないが、まだそ

he'll be there a little while and it would be wonderful to be nearer ... Of course, that might mean we're here for Christmas. ...”

“The more the merrier!” said Sirius with such obvious sincerity that Mrs. Weasley beamed at him, threw on an apron, and began to help with breakfast.

“Sirius,” Harry muttered, unable to stand it a moment longer. “Can I have a quick word? Er — *now*?”

He walked into the dark pantry and Sirius followed. Without preamble Harry told his godfather every detail of the vision he had had, including the fact that he himself had been the snake who had attacked Mr. Weasley.

When he paused for breath, Sirius said, “Did you tell Dumbledore this?”

“Yes,” said Harry impatiently, “but he didn’t tell me what it meant. Well, he doesn’t tell me anything anymore. ...”

“I’m sure he would have told you if it was anything to worry about,” said Sirius steadily.

“But that’s not all,” said Harry in a voice only a little above a whisper. “Sirius, I ... I think I’m going mad. ... Back in Dumbledore’s office, just before we took the Portkey ... for a couple of seconds there I thought I was a snake, I *felt* like one — my scar really hurt when I was looking at Dumbledore — Sirius, I wanted to attack him —”

He could only see a sliver of Sirius’s face; the rest was in darkness.

“It must have been the aftermath of the vision, that’s all,” said Sirius. “You were still thinking of the dream or whatever it was and —”

“It wasn’t that,” said Harry, shaking his

のことを考えていたんだよ」

「そんなんじゃない」ハリーは首を振った。  
「何かが僕の中で伸び上がったんだ。まるで  
体の中に蛇がいるみたいに」

「眠らないと」シリウスがきっぱりと言っ  
た。

「朝食を食べたら、上に行って休みなさい。  
昼食のあとで、みんなと一緒にアーサーの面  
会に行けばいい。ハリー、君はショックを受  
けているんだ。単に目撃しただけのことを、  
自分のせいにして責めている。それに、君が  
目撃したのは幸運なことだったんだ。そうで  
なければ、アーサーは死んでいたかもしれな  
い。心配するのはやめなさい」  
シリウスはハリーの肩をポンポンと叩き、食  
料庫から出ていった。

ハリーは独り暗がりに取り残された。ハリー  
以外のみんなが午前中を寝て過ごした。

ハリーは、ロンと一緒に夏休み最後の数週間  
を過ごした寝室に上がっていった。

ロンのほうはベッドに潜り込むなりたちまち  
眠り込んだが、ハリーは服を着たまま、金属  
製の冷たいベッドの背もたれに寄り掛かり、  
背中を丸め、わざと居心地の悪い姿勢を取っ  
て、眠り込むまいとした。

眠るとまた蛇になるのではないか、目覚めた  
ときに、ロンを襲ってしまったとか、誰かを  
襲おうと家の中を這いずり回っていたことに  
気づくのではないかと思うと、恐ろしかった。

ロンが目覚めたとき、ハリーもよく寝て気持  
よく目覚めたようなふりをした。

昼食の最中に全員のトランクがホグワーツか  
ら到着し、マグルの服を着て聖マンガに出か  
けられるようになった。

ローブを脱いでジーンズと、シャツに着替え  
ながら、ハリー以外のみんなは、うれしくて  
はしゃぎ、饒舌になっていた。ロンドンの街  
中をつき添っていくトンクスとマッドアイ  
が到着したときには、全員が大喜びで迎え、  
マッドアイが魔法の目を隠すのにあみだに  
被った山高帽を笑った。

トンクスは、また鮮やかなピンク色の短い髪  
をしていたが、地下鉄ではトンクスよりマッ  
ドアイのほうが間違いなく目立つと、冗談

head. “It was like something rose up inside me,  
like there’s a *snake* inside me —”

“You need to sleep,” said Sirius firmly.  
“You’re going to have breakfast and then go  
upstairs to bed, and then you can go and see  
Arthur after lunch with the others. You’re in  
shock, Harry; you’re blaming yourself for  
something you only witnessed, and it’s lucky  
you *did* witness it or Arthur might have died.  
Just stop worrying. ...”

He clapped Harry on the shoulder and left  
the pantry, leaving Harry standing alone in the  
dark.

Everyone but Harry spent the rest of the  
morning sleeping. He went up to the bedroom  
he had shared with Ron over the summer, but  
while Ron crawled into bed and was asleep  
within minutes, Harry sat fully clothed,  
hunched against the cold metal bars of the  
bedstead, keeping himself deliberately  
uncomfortable, determined not to fall into a  
doze, terrified that he might become the  
serpent again in his sleep and awake to find  
that he had attacked Ron, or else slithered  
through the house after one of the others. ...

When Ron woke up, Harry pretended to  
have enjoyed a refreshing nap too. Their trunks  
arrived from Hogwarts while they were eating  
lunch, so that they could dress as Muggles for  
the trip to St. Mungo’s. Everybody except  
Harry was riotously happy and talkative as  
they changed out of their robes into jeans and  
sweatshirts, and they greeted Tonks and Mad-  
Eye, who had turned up to escort them across  
London, gleefully laughing at the bowler hat  
Mad-Eye was wearing at an angle to conceal  
his magical eye and assuring him, truthfully,  
that Tonks, whose hair was short and bright  
pink again, would attract far less attention on

抜きでみんながマッド アイに請け合った。トンクスは、ウィーズリー氏が襲われた光景をハリーが見たことに、とても興味を持ったが、ハリーはまったくそれを話題にする気がなかった。

「君の血筋に、『予見者』はいないの？」ロンドン市内に向かう電車で並んで腰掛け、トンクスが興味深げにハリーに聞いた。

「いない」ハリーはトレローニー先生のことを考え、侮辱されたような気がした。

「違うのか」トンクスは考え込むように言った。

「違うな。君のやってることは、厳密な予言っていうわけじゃないものね。つまり、君は未来を見ているわけじゃなくて、現在を見ているんだ……変だね？でも、役に立つけど…」

ハリーは答えなかった。うまい具合に、次の駅でみんな電車を降りた。

ロンドンの中心部にある駅だった。電車を降りるとさくさに紛れ、ハリーは、先頭に立ったトンクスと自分の間にフレッドとジョージを割り込ませることができた。

みんながトンクスに従ってエスカレーターを上がった。

ムーディはしんがりで、山高帽を斜め目深に被り、節くれだった手を片方、ボタンの間からマントの懷に差し込んで杖を握り締め、コツコツと歩いてきた。

ハリーは、隠れた目がじっと自分を見ているような感じがした。

夢のことをこれ以上聞かれないように、ハリーはマッド アイに、聖マンガがどこに隠されているかと質問した。

「ここからそう遠くない」ムーディが唸るように言った。

駅を出ると、冬の空気は冷たく、広い通りの両側にはびっしくと店が並んで、クリスマスの買物客で一杯だった。

ムーディはハリーを少し前に押し出し、すぐ後ろをコツコツと歩いてきた。

あみだに被った帽子の下で、例の目がぐるぐると四方八方を見ていることが、ハリーにはわかった。

「病院に格好の場所を探すのには難儀した。

the underground.

Tonks was very interested in Harry's vision of the attack on Mr. Weasley, something he was not remotely interested in discussing.

"There isn't any *Seer* blood in your family, is there?" she inquired curiously, as they sat side by side on a train rattling toward the heart of the city.

"No," said Harry, thinking of Professor Trelawney and feeling insulted.

"No," said Tonks musingly, "no, I suppose it's not really prophecy you're doing, is it? I mean, you're not seeing the future, you're seeing the present. ... It's odd, isn't it? Useful, though ..."

Harry did not answer; fortunately they got out at the next stop, a station in the very heart of London, and in the bustle of leaving the train he was able to allow Fred and George to get between himself and Tonks, who was leading the way. They all followed her up the escalator, Moody clunking along at the back of the group, his bowler tilted low and one gnarled hand stuck in between the buttons of his coat, clutching his wand. Harry thought he sensed the concealed eye staring hard at him; trying to deflect more questions about his dream he asked Mad-Eye where St. Mungo's was hidden.

"Not far from here," grunted Moody as they stepped out into the wintry air on a broad store-lined street packed with Christmas shoppers. He pushed Harry a little ahead of him and stumped along just behind; Harry knew the eye was rolling in all directions under the tilted hat. "Wasn't easy to find a good location for a hospital. Nowhere in Diagon Alley was big enough and we couldn't have it underground like the Ministry — unhealthy. In the end they managed to get hold of a building up here.

ダイアゴン横丁には、どこにも十分な広さがなかったし、魔法省の地下に潜らせることもできん——不健康なんでな。結局、ここにあるビルをなんとか手に入れた。病気の魔法使いが出入りしても、人混みに紛れてしまう所だという理屈でな」

すぐそばに電気製品をぎっしり並べた店があった。そこに入ることで頭が一杯の買物客に吞まれて逸れてしまわないようにと、ムーディはハリーの肩をつかんだ。

「ほれ、そこだ」まもなくムーディが言った。

赤レンガの、流行遅れの大きなデパートの前に着いていた。

『ページ アンド ダウズ商会』と書いてある。

みすばらしい、しょぼくれた雰囲気のところだ。

ショーウィンドーには、あちこち欠けたマネキンが数体、曲がった髪をつけて、少なくとも十年ぐらい流行遅れの服を着て、てんてんばらばらに立っている。

埃だらけのドアというドアには大きな看板が掛かり、「改装のため閉店中」と書いてある。

ビニールの買物袋をたくさん抱えた大柄な女性が、通りすがりに友達に話しかけるのを、ハリーははっきりと聞いた。

「一度も開いてたことなんかないわよ、ここ」

「さてと」トンクスが、みんなにショーウィンドーのほうに来るように合図した。

ことさら醜いマネキン人形が一体飾られている場所だ。

つけ睫毛が取れかかってぶら下がり、緑色のナイロンのエプロンドレスを着ている。

「みんな、準備オッケー？」

みんながトンクスの周りに集まって頷いた。

ムーディがハリーの肩甲骨の間あたりを押し、前に出るように促した。

トンクスはウィンドーのガラスに近寄り、息でガラスを曇らせながら、ひどく醜いマネキンを見上げて声をかけた。

「こんちわ。アーサー ウィーズリーに面会に来ただけだ」

Theory was sick wizards could come and go and just blend in with the crowd. ...”

He seized Harry’s shoulder to prevent them being separated by a gaggle of shoppers plainly intent on nothing but making it into a nearby shop full of electrical gadgets.

“Here we go,” said Moody a moment later.

They had arrived outside a large, old-fashioned, red brick department store called Purge and Dowse Ltd. The place had a shabby, miserable air; the window displays consisted of a few chipped dummies with their wigs askew, standing at random and modeling fashions at least ten years out of date. Large signs on all the dusty doors read CLOSED FOR REFURBISHMENT. Harry distinctly heard a large woman laden with plastic shopping bags say to her friend as they passed, “It’s *never* open, that place. ...”

“Right,” said Tonks, beckoning them forward to a window displaying nothing but a particularly ugly female dummy whose false eyelashes were hanging off and who was modeling a green nylon pinafore dress. “Everybody ready?”

They nodded, clustering around her; Moody gave Harry another shove between the shoulder blades to urge him forward and Tonks leaned close to the glass, looking up at the very ugly dummy and said, her breath steaming up the glass, “Wotcher ... We’re here to see Arthur Weasley.”

For a split second, Harry thought how absurd it was for Tonks to expect the dummy to hear her talking that quietly through a sheet of glass, when there were buses rumbling along behind her and all the racket of a street full of shoppers. Then he reminded himself that dummies could not hear anyway. Next second his mouth opened in shock as the

ガラス越しにそんなに低い声で話してマネキンに聞こえると思うなんて、トンクスはどうかしている、とハリーは思った。  
トンクスのすぐ後ろをバスがガタガタ走っているし、買物客で一杯の通りはやかましかった。  
そのあと、そもそもマネキンに聞こえるはずがないと気がついた。  
次の瞬間、ハリーはショックで口があんぐり開いた。  
マネキンが小さく頷き、節に継ぎ目のある指で手招きしたのだ。  
トンクスはジニーとウィーズリーおばさんの肘をつかみ、ガラスをまっすぐ突き抜けて姿を消した。  
フレッド、ジョージ、ロンがそのあとに続いた。  
ハリーは周囲にひしめき合う人混みをちらりと見回した。  
「パージ アンド ダウズ商会」のような汚らしいショーウィンドーに、ただの一瞥もくられるような暇人はいないし、たったいま、六人もの人間が目の前から掻き消すようにいなくなったことに、誰一人気づく様子もない。  
「さあ」ムーディがまたしてもハリーの背中を突ついて唸るように言った。  
ハリーは一緒に前に進み、冷たい水のような感触の膜の中を突き抜けた。  
しかし、反対側に出た二人は冷えてもいなかったし、濡れてもいなかった。  
醜いマネキンは跡形もなく消え、マネキンが立っていた場所もない。  
そこは、混み合った受付のような所で、ぐらぐらした感じの木の椅子が何列も並び、魔法使いや魔女が座っていた。  
見たところどこも悪くなさそうな顔で、古い「週刊魔女」をパラパラ捲っている人もいれば、胸から象の鼻や余分な手が生えた、ぞっとするような姿形の人もいる。  
この部屋も外の通りより静かだとは言えない。  
患者の多くが、奇妙キテレツな音を立てているからだ。  
一番前の列の真ん中では、汗ばんだ顔の魔女が「日刊予言者」で激しく顔を扇ぎながら、

dummy gave a tiny nod, beckoned its jointed finger, and Tonks had seized Ginny and Mrs. Weasley by the elbows, stepped right through the glass and vanished.

Fred, George, and Ron stepped after them; Harry glanced around at the jostling crowd; not one of them seemed to have a glance to spare for window displays as ugly as Purge and Dowse Ltd.'s, nor did any of them seem to have noticed that six people had just melted into thin air in front of them.

“C’mon,” growled Moody, giving Harry yet another poke in the back and together they stepped forward through what felt like a sheet of cool water, emerging quite warm and dry on the other side.

There was no sign of the ugly dummy or the space where she had stood. They had arrived in what seemed to be a crowded reception area where rows of witches and wizards sat upon rickety wooden chairs, some looking perfectly normal and perusing out-of-date copies of *Witch Weekly*, others sporting gruesome disfigurements such as elephant trunks or extra hands sticking out of their chests. The room was scarcely less quiet than the street outside, for many of the patients were making very peculiar noises. A sweaty-faced witch in the center of the front row, who was fanning herself vigorously with a copy of the *Daily Prophet*, kept letting off a high-pitched whistle as steam came pouring out of her mouth, and a grubby-looking warlock in the corner clanged like a bell every time he moved, and with each clang his head vibrated horribly, so that he had to seize himself by the ears and hold it steady.

Witches and wizards in lime-green robes were walking up and down the rows, asking questions and making notes on clipboards like Umbridge's. Harry noticed the emblem embroidered on their chests: a wand and bone,

ホイッスルのような甲高い音を出し続け、口から湯気を吐いていた。

隅のほうのむさくるしい魔法戦士は、動くたびに鐘の音がした。

そのたびに頭がひどく揺れるので、自分で両耳を押さえて頭を安定させていた。

ライムのような緑色のローブを着た魔法使いや魔女が、列の間を往ったり来たりして質問し、アンブリッジのようにクリップボードに書き留めていた。

ハリーは、ローブの胸にある縫い取りに気づいた。

杖と骨がクロスしている。

「あの人たちは医者なのかい？」ハリーはそっとロンに聞いた。

「医者？」ロンはまさかという目をした。

「人間を切り刻んじゃう、マグルの変人のこと？ 違うさ。癒しの『癒者』だよ」

「こっちょ！」隅の魔法戦士が鳴らす鐘の音に負けない声で、ウィーズリーおばさんが呼んだ。

みんながおばさんについて一列に並んだ。列の前には「案内係」と書いたデスクがあり、ブロンドのふっくらした魔女が座っていた。その後ろには、壁一面に掲示やらポスターが貼ってある。

鍋が不潔じゃ薬も毒よ

無許可の解毒剤は無解毒剤

長い銀色の巻き毛の魔女の大きな肖像画も掛かっていて、説明がついている。

ディリス ダーウェント

聖マンガの癒者 一七二二—一七四一  
 Hogwarts魔法魔術学校校長 一七四一—一七六八

ディリスは、ウィーズリー一行を数えているような目で見ている。

ハリーと目が合うと、ちょこりとウィンクして、額の縁のほうに歩いていき、姿を消した。

一方、列の先頭の若い魔法使いは、その場で

crossed.

“Are they doctors?” he asked Ron quietly.

“Doctors?” said Ron, looking startled. “Those Muggle nutters that cut people up? Nah, they’re Healers.”

“Over here!” called Mrs. Weasley over the renewed clanging of the warlock in the corner, and they followed her to the queue in front of a plump blonde witch seated at a desk marked inquiries. The wall behind her was covered in notices and posters saying things like A CLEAN CAULDRON KEEPS POTIONS FROM BECOMING POISONS and ANTIDOTES ARE ANTI-DON’TS UNLESS APPROVED BY A QUALIFIED HEALER.

There was also a large portrait of a witch with long silver ringlets that was labelled

## DILYS DERWENT

ST. MUNGO’S HEALER 1722–1741

HEADMISTRESS OF HOGWARTS SCHOOL OF

WITCHCRAFT AND WIZARDRY, 1741–1768

Dilys was eyeing the Weasley party as though counting them; when Harry caught her eye she gave a tiny wink, walked sideways out of her portrait, and vanished.

Meanwhile, at the front of the queue, a young wizard was performing an odd on-the-spot jig and trying, in between yelps of pain, to explain his predicament to the witch behind the desk.

“It’s these — ouch — shoes my brother gave me — ow — they’re eating my — OUCH — feet — look at them, there must be some kind of — AARGH — jinx on them and I can’t — AAAAARGH — get them off —”

<p>へんてこなジグ ダンスを踊りながら、痛そうな悲鳴の合間に、案内魔女に苦難の説明をしていた。</p> <p>「問題はこの――イテッー兄貴にもらった靴でして――うっー食いつくんですよ――アイタッー足に――靴を見てやってください。きつとなんかの――ああううー呪いがかかっている。どうやっても――あああああううー脱げないんだ」</p> <p>片足でびよん、別の足でびよんと、まるで焼けた石炭の上で踊っているようだった。</p> <p>「あなた、別に靴のせいで字が読めないわけではありませんね？」ブロンドの魔女は、イライラとデスクの左側の大きな掲示を指差した。</p> <p>「あなたの場合は『呪文性損傷』。五階。ちゃんと『病院案内』に書いてあるとおり。はい、次！」</p> <p>その魔法使いが、よろけたり、踊り跳ねたりしながら脇に避け、ウィーズリー一家が数歩前に進んだ。</p> <p>ハリーは「病院案内」を読んだ。</p> <p>一階 物品性事故……大鍋爆発、杖逆噴射、箒衝突など</p> <p>二階 生物性傷害……噛み傷、刺し傷、火傷、とげ埋め込み など</p> <p>三階 魔クテリア性疾患……感染症（龍癌など）、消滅症、巻き黴 など</p> <p>四階 薬剤 植物性中毒……湿疹、嘔吐、抑制不能クスクス笑い など</p> <p>五階 呪文性損傷……解除不能性呪い、呪誼、不適正使用呪文 など</p> <p>六階</p>	<p>He hopped from one foot to the other as though dancing on hot coals.</p> <p>“The shoes don’t prevent you reading, do they?” said the blonde witch irritably, pointing at a large sign to the left of her desk. “You want Spell Damage, fourth floor. Just like it says on the floor guide. Next!”</p> <p>The wizard hobbled and pranced sideways out of the way, the Weasley party moved forward a few steps and Harry read the floor guide:</p> <p><b>ARTIFACT</b> <b>ACCIDENTS.</b> ... . ... . ... . ... <i>Ground Floor</i></p> <p><i>(Cauldron explosion, wand backfiring, broom crashes, etc.)</i></p> <p><b>CREATURE-INDUCED</b> <b>INJURIES.</b> ... . ... . ... . ... <i>First Floor</i></p> <p><i>(Bites, stings, burns, embedded spines, etc.)</i></p> <p><b>MAGICAL BUGS.</b> ... . ... . ... . ... . ... . <i>Second Floor</i></p> <p><i>(Contagious maladies, e.g., dragon pox, vanishing sickness, scrofungulus)</i></p> <p><b>POTION AND PLANT</b> <b>POISONING.</b> ... . ... . ... . ... <i>Third Floor</i></p> <p><i>(Rashes, regurgitation, uncontrollable giggling, etc.)</i></p> <p><b>SPELL DAMAGE.</b> ... . ... . ... . ... . ... . <i>Fourth Floor</i></p> <p><i>(Unliftable jinxes, hexes, and incorrectly applied charms, etc.)</i></p> <p><b>VISITORS’ TEAROOM AND HOSPITAL SHOP.</b> ... . <i>Fifth Floor</i></p> <p><i>If you are unsure where to go, incapable, of</i></p>
--	---



外来者喫茶室 売店

何階かわからない方、通常の話ができない方、  
どうしてここにいるのか思い出せない方は、案内魔女がお手伝いいたします。

腰が曲がり、耳に補聴トランベットをつけた年寄り魔法使いが、足を引きずりながら列の先頭に進み出て、ゼイゼイ声で言った。

「プロデリック ボードに面会に来たんじゃが」

「49号室。でも、会ってもむだだと思いますよ」案内魔女がにべもなく言った。

「完全に錯乱してますからねーまだ自分は急須だと思ひ込んでいます。次！」

困り果てた顔の魔法使いが、幼い娘の足首をしっかりとつかんで進み出た。

娘はロンパースの背中を突き抜けて争え出ている大きな翼をパタパタさせ、父親の頭の周りを飛び回っている。

「五階」案内魔女が、何も聞かずにうんざりした声で言った。

父親は、変な形の風船のような娘を手を持って、デスク脇の両開きの扉から出ていった。

「次！」ウィーズリーおばさんがデスクの前に進み出た。

「こんにちは。夫のアーサー ウィーズリーが、今朝、別の病棟に移ったと思うんですけど、どこでしょうかー？」

「アーサー ウィーズリーね？」案内魔女が、長いリストに指を走らせながら聞き返した。

「ああ、二階よ。右側の二番目のドア。ダイルウェリン病棟」

「ありがとう」おばさんが礼を言った。

「さあ、みんないらっしゃい」

おばさんについて、全員が両開きの扉から入った。

その向こうは細長い廊下で、有名な癒者の肖像画がずらりと並び、蝋燭の詰まったクリスタルの球が、巨大なシャボン玉のようにいくつも天井に浮かんでいた。

一行は、ライム色のロープを着た魔法使いや

*normal speech, or unable to remember why you are here, our Welcome Witch will be pleased to help.*

A very old, stooped wizard with a hearing trumpet had shuffled to the front of the queue now.

“I’m here to see Broderick Bode!” he wheezed.

“Ward forty-nine, but I’m afraid you’re wasting your time,” said the witch dismissively “He’s completely addled, you know, still thinks he’s a teapot. ... Next!”

A harassed-looking wizard was holding his small daughter tightly by the ankle while she flapped around his head using the immensely large, feathery wings that had sprouted right out the back of her romper suit.

“Fourth floor,” said the witch in a bored voice, without asking, and the man disappeared through the double doors beside the desk, holding his daughter like an oddly shaped balloon. “Next!”

Mrs. Weasley moved forward to the desk.

“Hello,” she said. “My husband, Arthur Weasley, was supposed to be moved to a different ward this morning, could you tell us —?”

“Arthur Weasley?” said the witch, running her finger down a long list in front of her. “Yes, first floor, second door on the right, Dai Llewellyn ward.”

“Thank you,” said Mrs. Weasley. “Come on, you lot.”

They followed through the double doors and along the narrow corridor beyond, which was lined with more portraits of famous Healers and lit by crystal bubbles full of candles that

魔女が大勢出入りしている扉の前をいくつか通り過ぎた。

ある扉の前には、いやな臭いの黄色いガスが廊下に流れ出していた。時々遠くから、悲しげな泣き声が聞こえてきた。

一行は二階への階段を上り、「生物性傷害」の階に出た。

右側の二番目のドアに何か書いてある。

「危険な野郎」タイ　ルウェリン記念病棟ー  
ー重篤な噛み傷

その横に、真鍮の枠に入った手書きの名札があった。

担当癒師　ヒポクラテス　スメスウィック  
研修癒　オーガスタス　パイ

「私たちは外で待ってるわ、モリー」トンクスが言った。

「大勢でいっぺんにお見舞いしたら、アーサーにもよくないし……最初は家族だけにすべきだわ」

マッド　アイも賛成と唸り、廊下の壁に寄り掛かり、魔法の目を四方八方にぐるぐる回した。

ハリーも身を引いた。しかし、ウィーズリーおばさんがハリーに手を伸ばし、ドアから押し込んだ。

「ハリー、遠慮なんかしないで。アーサーがあなたにお礼を言いたいのだ」

病室は小さく、ドアの向かい側に小さな高窓が一つあるだけなので、かなり陰気臭かった。

明かりはむしろ、天井の真ん中に集まっているクリスタル球の輝きから来ていた。

壁は桎材の板張りで、かなり悪人面の魔法使いの肖像画が掛かっていた。説明書がある。

ウルクハート　ラックハロウ　一六一二ー一六  
九七　内臓抜き出し呪いの発明者

患者は三人しかいない。

ウィーズリー氏のベッドが一番奥の、小さな高窓のそばにあった。

ハリーはおじさんの様子を見て、ほっとし

floated up on the ceiling, looking like giant soapsuds. More witches and wizards in lime-green robes walked in and out of the doors they passed; a foul-smelling yellow gas wafted into the passageway as they passed one door, and every now and then they heard distant wailing. They climbed a flight of stairs and entered the “Creature-Induced Injuries” corridor, where the second door on the right bore the words “DANGEROUS” DAI LLEWELLYN WARD: SERIOUS BITES. Underneath this was a card in a brass holder on which had been handwritten *Healer-in-Charge: Hippocrates Smethwyck, Trainee Healer: Augustus Pye*.

“We’ll wait outside, Molly,” Tonks said. “Arthur won’t want too many visitors at once. ... It ought to be just the family first.”

Mad-Eye growled his approval of this idea and set himself with his back against the corridor wall, his magical eye spinning in all directions. Harry drew back too, but Mrs. Weasley reached out a hand and pushed him through the door, saying, “Don’t be silly, Harry, Arthur wants to thank you. ...”

The ward was small and rather dingy as the only window was narrow and set high in the wall facing the door. Most of the light came from more shining crystal bubbles clustered in the middle of the ceiling. The walls were of panelled oak and there was a portrait of a rather vicious-looking wizard on the wall, captioned URQUHART RACKHARROW, 1612–1697, INVENTOR OF THE ENTRAIL-EXPPELLING CURSE.

There were only three patients. Mr. Weasley was occupying the bed at the far end of the ward beside the tiny window. Harry was pleased and relieved to see that he was propped up on several pillows and reading the *Daily Prophet* by the solitary ray of sunlight falling onto his bed. He looked around as they walked

た。

おじさんは枕をいくつか重ねてもたれ掛かり、ベッドに射し込むただ一筋の太陽光の下で、「日刊予言者新聞」を読んでいた。みんなが近づくと、おじさんは顔を上げ、訪問者が誰だかわかるとにっこりした。

「やあ！」おじさんが新聞を脇に置いて声をかけた。

「モリー、ビルはいましがた帰ったよ。仕事に戻らなきゃならなくてね。でも、あとで母さんのところに寄ると言っていた」

「アーサー、具合はどう？」おばさんは屈んでおじさんの頬にキスし、心配そうに顔を覗き込んだ。

「まだ少し顔色が悪いわね」

「気分は上々だよ」おじさんは元気よくそう言うと、怪我をしていないほうの腕を伸ばしてジニーを抱き寄せた。

「包帯が取れさえすれば、家に帰れるんだが」

「パパ、なんで包帯が取れないんだい？」フレッドが聞いた。

「うん、包帯を取ろうとすると、そのたびにどっと出血しはじめるんでね」おじさんは機嫌よくそう言うと、ベッド脇の棚に置いてあった杖を取り、一振りして、全員が座れるよう、椅子を六脚、ベッド脇に出した。

「あの蛇の牙にはどうやら、傷口が塞がらないようにする、かなり特殊な毒があったらしい。ただ、病院では、かならず解毒剤が見つかるはずだと言っていたよ。私よりもっとひどい症例もあったらしい。それまでは、血液補充薬を一時間おきに飲まなきゃいけないがね。しかし、あそこの人なんか」

おじさんは声を落として、反対側のベッドのほうを顎で指した。

そこには、蒼ざめて気分が悪そうな魔法使いが、天井を見つめて横たわっていた。

「狼人間に噛まれたんだ。かわいそうに。治療のしょうがない」

「狼人間？」おばさんが驚いたような顔をした。

「一般病棟で大丈夫なのかしら？個室に入るべきじゃない？」

「満月まで二週間ある」おじさんは静かにお

toward him and, seeing whom it was, beamed.

“Hello!” he called, throwing the *Prophet* aside. “Bill just left, Molly, had to get back to work, but he says he’ll drop in on you later. ...”

“How are you, Arthur?” asked Mrs. Weasley, bending down to kiss his cheek and looking anxiously into his face. “You’re still looking a bit peaky. ...”

“I feel absolutely fine,” said Mr. Weasley brightly, holding out his good arm to give Ginny a hug. “If they could only take the bandages off, I’d be fit to go home.”

“Why can’t they take them off, Dad?” asked Fred.

“Well, I start bleeding like mad every time they try,” said Mr. Weasley cheerfully, reaching across for his wand, which lay on his bedside cabinet, and waving it so that six extra chairs appeared at his bedside to seat them all. “It seems there was some rather unusual kind of poison in that snake’s fangs that keeps wounds open. ... They’re sure they’ll find an antidote, though, they say they’ve had much worse cases than mine, and in the meantime I just have to keep taking a Blood-Replenishing Potion every hour. But that fellow over there,” he said, dropping his voice and nodding toward the bed opposite in which a man lay looking green and sickly and staring at the ceiling. “Bitten by a *werewolf*, poor chap. No cure at all.”

“A werewolf?” whispered Mrs. Weasley, looking alarmed. “Is he safe in a public ward? Shouldn’t he be in a private room?”

“It’s two weeks till full moon,” Mr. Weasley reminded her quietly. “They’ve been talking to him this morning, the Healers, you know, trying to persuade him he’ll be able to

ばさんをなだめた。

「今朝、病院の人が――癒者だがね――あの  
人に話していた。ほとんど普通の生活を送れ  
るようになるからと、説得しようとしてい  
た。私も、あの人に教えてやったよ。名前は  
もちろん伏せたが、個人的に狼人間を一人知  
っているとね。立派な魔法使いで、自分の状  
況を楽々管理していると話してやった」

「そしたらなんて言った？」ジョージが聞いた。

「黙らないと噛みついてやるって言ったよ」  
ウィーズリーおじさんが悲しそうに言った。  
「それから、あそこのご婦人だが」おじさん  
が、ドアのすぐ脇にある、あと一つだけ埋ま  
っているベッドを指した。

「何に噛まれたのか、癒者にも教えない。だ  
から、みんなが、何か違法なものを扱ってい  
てやられたに違いないと思っているんだが  
ね。そのなんだか知らないやつが、あの人の  
足をがっぽり食いちぎっている。包帯を取  
ると、いやな悪臭がするんだ」

「それで、パパ、何があったのか、教えてく  
れる？」フレッドが椅子を引いてベッドに近  
寄った。

「いや、もう知ってるんだろう？」ウィーズ  
リーおじさんは、ハリーのほうに意味ありげ  
に微笑みながら言った。

「ごく単純だ――長い一日だったし、居眠り  
をして、忍び寄られて、噛まれた」

「パパが襲われたこと、『日刊予言者』に載  
ってるの？」フレッドが、ウィーズリーおじ  
さんが脇に置いた新聞を指した。

「いや、もちろん載っていない」おじさんは  
少し苦笑いした。

「魔法省は、みんなに知られたくないだろう  
よ。とてつもない大蛇が狙ったのは――」

「アーサー！」おばさんが警告するように呼  
びかけた。

「狙ったのは――え――私だったと」ウィ  
ーズリーおじさんは慌てて取り繕ったが、ハ  
リーは、おじさんが絶対に別のことを言うつ  
もりだったと思った。

「それで、襲われたとき、パパ、どこにいた  
の？」ジョージが聞いた。

「おまえには関係のないことだ」おじさんは

lead an almost normal life. I said to him —  
didn't mention names, of course — but I said I  
knew a werewolf personally, very nice man,  
who finds the condition quite easy to  
manage. ...”

“What did he say?” asked George.

“Said he'd give me another bite if I didn't  
shut up,” said Mr. Weasley sadly. “And that  
woman over *there*,” he indicated the only other  
occupied bed, which was right beside the door,  
“won't tell the Healers what bit her, which  
makes us all think it must have been something  
she was handling illegally. Whatever it was  
took a real chunk out of her leg, *very* nasty  
smell when they take off the dressings.”

“So, you going to tell us what happened,  
Dad?” asked Fred, pulling his chair closer to  
the bed.

“Well, you already know, don't you?” said  
Mr. Weasley, with a significant smile at Harry.  
“It's very simple — I'd had a very long day,  
dozed off, got sneaked up on, and bitten.”

“Is it in the *Prophet*, you being attacked?”  
asked Fred, indicating the newspaper Mr.  
Weasley had cast aside.

“No, of course not,” said Mr. Weasley, with  
a slightly bitter smile, “the Ministry wouldn't  
want everyone to know a dirty great serpent  
got —”

“Arthur!” said Mrs. Weasley warningly.

“— got — er — me,” Mr. Weasley said  
hastily, though Harry was quite sure that was  
not what he had meant to say.

“So where were you when it happened,  
Dad?” asked George.

“That's my business,” said Mr. Weasley,  
though with a small smile. He snatched up the  
*Daily Prophet*, shook it open again and said, “I

そう言い放ったが、微笑んでいた。  
おじさんは「日刊予言者新聞」をまた急に拾い上げ、パッと振って開いた。

「みんなが来たとき、ちょうど『ウィリー・ウィダーシン逮捕』の記事を読んでいたんだ。この夏の例の逆流トイレ事件を覚えているね？ ウィリーがその陰の人物だったんだよ。最後に呪いが逆噴射して、トイレが爆発し、やっこさん、瓦礫の中に気を失って倒れているところを見つけたんだが、頭のとっぺんから爪先まで、そりゃ、クソまみれ——」

「パパが『任務中』だったっていうときは」フレッドが低い声で口を挟んだ。

「何をしていたの？」

「お父さまのおっしゃったことが聞こえたでしょう？」ウィーズリーおばさんが囁いた。「ここはそんなことを話すところじゃありません！ あなた、ウィリー・ウィダーシンの話を続けて」

「それでだ、どうやってやったのかはわからんが、やつはトイレ事件で罪に問われなかったんだ」ウィーズリーおじさんが不機嫌に言った。

「金貨が動いたんだろうな——」

「パパは護衛してたんでしょう？」ジョージがひっそりと言った。

「武器だよな？ 『例のあの人』が探してるっていうやつ？」

「ジョージ、お黙り！」おばさんがビシッと言った。

「とにかくだ」おじさんが声を張りあげた。「今度はウィリーのやつ、『噛みつきドア取っ手』をマグルに売りつけているところを捕まった。今度こそ逃げられるものか。なにしろ、新聞によると、マグルが二人、指を失くして、いま、聖マンガで、救急骨再生治療と記憶修正を受けているらしい。どうだい、マグルが聖マンガにいるんだ。どの病棟かな？」

おじさんは、どこかに掲示がないかと、熱心にあたりを見回した。

「『例のあの人』が蛇を持ってるって、ハリー、君、そう言わなかった？」フレッドが、父親の表情を窺いながら聞いた。

was just reading about Willy Widdershins's arrest when you arrived. You know Willy turned out to be behind those regurgitating toilets last summer? One of his jinxes backfired, the toilet exploded, and they found him lying unconscious in the wreckage covered from head to foot in —”

“When you say you were ‘on duty,’ ” Fred interrupted in a low voice, “what were you doing?”

“You heard your father,” whispered Mrs. Weasley, “we are not discussing this here! Go on about Willy Widdershins, Arthur —”

“Well, don’t ask me how, but he actually got off on the toilet charge,” said Mr. Weasley grimly. “I can only suppose gold changed hands —”

“You were guarding it, weren’t you?” said George quietly. “The weapon? The thing You-Know-Who’s after?”

“George, be quiet!” snapped Mrs. Weasley.

“Anyway,” said Mr. Weasley in a raised voice, “this time Willy’s been caught selling biting doorknobs to Muggles, and I don’t think he’ll be able to worm his way out of it because according to this article, two Muggles have lost fingers and are now in St. Mungo’s for emergency bone regrowth and memory modification. Just think of it, Muggles in St. Mungo’s! I wonder which ward they’re in?”

And he looked eagerly around as though hoping to see a signpost.

“Didn’t you say You-Know-Who’s got a snake, Harry?” asked Fred, looking at his father for a reaction. “A massive one? You saw it the night he returned, didn’t you?”

“That’s enough,” said Mrs. Weasley crossly. “Mad-Eye and Tonks are outside, Arthur, they want to come and see you. And

「巨大なやつ? 『あの人』が復活した夜に、その蛇を見たんだろ?」

「いい加減になさい」ウィーズリーおばさんは不機嫌だった。

「アーサー、マッド アイとトンクスが外で待ってるわ。あなたに面会したいの。それから、あなたたちは外に出て待っていなさい」おばさんが子どもたちとハリーに向かって言った。

「あとでまたご挨拶にいらっしゃい。さあ、行って」

みんな並んで廊下に戻った。

マッド アイとトンクスが中に入り、病室のドアを閉めた。

フレッドが眉を吊り上げた。

「いいさ」フレッドがポケットをゴソゴソ探りながら、冷静に言った。

「そうやってりゃいいさ。俺たちには何にも教えるな」

「これを探してるのか?」ジョージが薄橙色の紐が絡まったようなものを差し出した。

「わかってるねえ」フレッドがにやりと笑った。

「聖マンガが病棟のドアに『邪魔よけ呪文』をかけているかどうか、見てみようじゃないか?」フレッドとジョージが紐を解き、五本の「伸び耳」に分けた。

二人が他の三人に配ったが、ハリーは受け取るのをためらった。

「取れよ、ハリー。君は親父の命を救った。盗聴する権利があるやつがいるとすれば、まず君だ」

思わずにやりとして、ハリーは紐の端を受け取り、双子がやっているように耳に差し込んだ。

「オッケー。行け!」フレッドが囁いた。薄橙色の紐は、痩せた長い虫のように、ゴニョゴニョ這っていき、ドアの下からクネクネ入り込んだ。

最初は何も聞こえなかったが、やがて、ハリーは飛び上がった。

トンクスの囁き声が、まるでハリーのすぐそばに立っているかのように、はっきり聞こえてきたのだ。

「……隈なく探したけど、蛇はどこにも見つ

you lot can wait outside,” she added to her children and Harry. “You can come and say good-bye afterward. Go on. ...”

They trooped back into the corridor. Mad-Eye and Tonks went in and closed the door of the ward behind them. Fred raised his eyebrows.

“Fine,” he said coolly, rummaging in his pockets, “be like that. Don’t tell us anything.”

“Looking for these?” said George, holding out what looked like a tangle of flesh-colored string.

“You read my mind,” said Fred, grinning. “Let’s see if St. Mungo’s puts Imperturbable Charms on its ward doors, shall we?”

He and George disentangled the string and separated five Extendable Ears from each other. Fred and George handed them around. Harry hesitated to take one.

“Go on, Harry, take it! You saved Dad’s life, if anyone’s got the right to eavesdrop on him it’s you. ...”

Grinning in spite of himself, Harry took the end of the string and inserted it into his ear as the twins had done.

“Okay, go!” Fred whispered.

The flesh-colored strings wriggled like long skinny worms, then snaked under the door. For a few seconds Harry could hear nothing, then he heard Tonks whispering as clearly as though she were standing right beside him.

“... they searched the whole area but they couldn’t find the snake anywhere, it just seems to have vanished after it attacked you, Arthur. ... But You-Know-Who can’t have expected a snake to get in, can he?”

“I reckon he sent it as a lookout,” growled Moody, “ ’cause he’s not had any luck so far,

からなかったらしいよ。アーサー、あなたを襲ったあと、蛇は消えちゃったみたい……だけど、『例のあの人』は蛇が中に入れるとは期待してなかったはずだよね？」

「わしの考えでは、蛇を偵察に送り込んだのだろう」ムーディの唸り声だ。

「なにしろ、これまでは、まったくの不首尾に終わっているだろうが？ うむ、やつは、立ち向かうべきものを、よりはっきり見ておこうとしたのだろう。アーサーがあそこにいなければ、蛇のやつはもっと時間をかけて見回ったはずだ。それで、ポッターは一部始終を見たと言っておるのだな？」

「ええ」ウィーズリーおばさんは、かなり不安そうな声だった。

「ねえ、ダンブルドアは、ハリーがこんなことを見るのを、まるで待ち構えていたような様子なの」

「うむ、まっこと」ムーディが言った。

「あのポッター坊主は、何かおかしい。それは、わしら全員が知っておる」

「今朝、私がダンブルドアとお話したとき、ハリーのことを心配なさっているようでしたわ」ウィーズリーおばさんが囁いた。

「むろん、心配しておるわ」ムーディが唸った。

「あの坊主は『例のあの人』の蛇の内側から事を見ておる。それが何を意味するか、ポッターは当然気づいておらぬ。しかし、『例のあの人』がポッターに取り憑いておるなら——」

ハリーは「伸び耳」を耳から引き抜いた。

心臓が早鐘を打ち、顔に血が上った。

ハリーはみんなを見回した。全員が、紐を耳から垂らしたまま、突然恐怖に駆られたように、じっとハリーを見ていた。

has he? No, I reckon he's trying to get a clearer picture of what he's facing and if Arthur hadn't been there the beast would've had much more time to look around. So Potter says he saw it all happen?"

"Yes," said Mrs. Weasley. She sounded rather uneasy. "You know, Dumbledore seems almost to have been waiting for Harry to see something like this. ..."

"Yeah, well," said Moody, "there's something funny about the Potter kid, we all know that."

"Dumbledore seemed worried about Harry when I spoke to him this morning," whispered Mrs. Weasley.

" 'Course he's worried," growled Moody. "The boy's seeing things from inside You-Know-Who's snake. ... Obviously, Potter doesn't realize what that means, but if You-Know-Who's possessing him —"

Harry pulled the Extendable Ear out of his own, his heart hammering very fast and heat rushing up his face. He looked around at the others. They were all staring at him, the strings still trailing from their ears, looking suddenly fearful.